

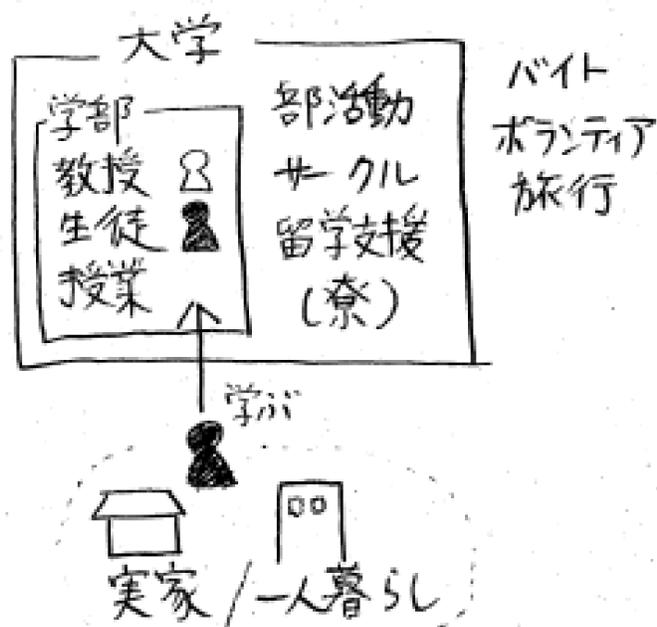
# “師弟型”大学制度の導入

氏名: 桑野 葵

## テーマ設定の理由

受験生となり、自宅から通えることを条件に大学探しをすると、案外選択肢が限られていることに気付いた。また、学力と部活動が「一長一短」であることが多いとも思った。働き方が多様化する中で、その前段階である大学の学び方も、もっと柔軟になってもいいのではないかと。

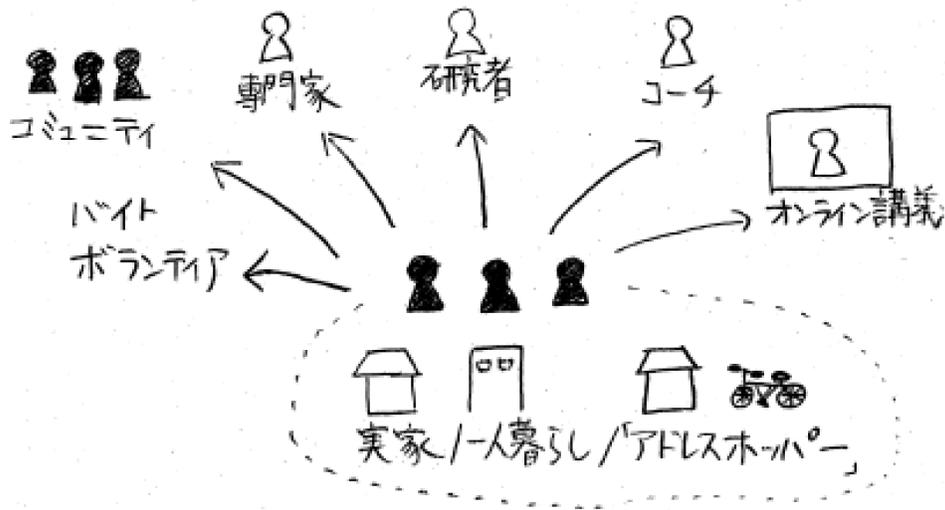
### <従来>



### 【行政や地域、自分たちにできること】

大学生として過ごす内容のほとんどが当然のことながら全て大学、もっと言えば自分の通うキャンパス・学部を集約されている。専門的知識を順序立てて教えてもらったり、同じことに関心がある人に会ったりするのに適した仕組み。〇〇大卒〇〇課程修了などは分かり易く肩書きになり、留学など様々なサポートを組織的に受けられる。

### <師弟型>



### 「自分で、話を聞きたい人に会いに行く」スタイル

大学の枠に縛られず、自分が学びたいこと、やってみたいことに挑戦できる。“受験戦争”、“学歴差別”、“入学者数の男女差”“大学の維持費”など「大学があること」に端を発する諸問題はそもそも発生しなくなる。教授側も、大学の都合に合わせず、自分の好きな研究等に打ち込めるだろう。大学の所在地に合わせて引っ越す必要がない。

### [行政]

- ・これまで大学が担ってきた支援制度の補填
- ・単位に代わる何らかの実績証明制度をつくること
- ・教授と学生をつなぐシステムの整備

### [地域]

- ・教授にとって活動しやすいかどうか＝学制、人が集まるかどうかになる。
- ・活動を応援できる制度づくり。地域の文化を伝えられる人が教授になる。
- ・地域で積極的に活動していた学生を、その地域の企業・役所に誘致。逆に社会人が学びながら働くことのサポート。